

取得に繋がりました。

今回は新型コロナウイルス感染防止の観点からZoomを用いたりモート形式にて開催し、教職員合計五十六名が参加しました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で対面講義・実習が大きく制限された状況下での遠隔講義・実習について議論がなされました。セッションIでは「遠隔講義の体験、長所短所の共有、注意点を議論」をテーマに、法医学講座の西谷陽子教授、形態構築学講座の福田孝一教授より実例などを紹介いただき、討論がなされました。さらにセッションIIでは「COVID-19感染拡大の状況下での臨床実習」をテーマに、診療科や学生へのアンケート調査結果を報告したのちに、地域医療・総合診療実践学寄附講座／地域医療支援センターの谷口純一特任教授、小児科学講座の中村公俊教授より各診療科での実例をご報告いただき、さらに議論がなされました。

ます。このFDWSが本学の医学教育を改善し、優れた医師の育成として社会貢献につながるものと確信しています。最後ではありますが、本ワークショップの企画、運営に尽力していただきました臨床医学教育研究センター 古川昇准教授、ならびに大変ご多用の中ご参加していただきました教職員の皆様に感謝申し上げますとともに、御支援をいただきました肥後医育振興会に御礼申し上げます。

第二十一回 熊本エイズセミナー報告

ヒトレトロウイルス学共同研究センター
教授・前キャンパス長 鈴木 伸也

今年度は新型コロナウイルス感染症の状況から当初の予定を大幅に変更し、Zoomによるオンライン開催としました(十一月十一日)。時差を考慮し、国内在住者の発表を中心としたため、海外からの参加者は少なかったものの、国内から多数の新規参加をいただき、結果、例年並みの百名近くの参加者数となりました(演題は十六の口演および三十三のポスター発表)。
制約、特に海外研究者の参加がほぼ不可能な中で今年度セミナーでは、



センター内、学内および国内の他機関との共同研究の進展を一つの目的としました。そして研究室主宰者(PI)ではなく、若手主導の共同研究の進展も別の目論見としました。そのため発表者は、招聘したミシガン大学村上知行および宮崎大学斎藤暁、最近センターに着任した教員・研究員、鹿児島大学キャンパスの研究員、本学血液内科に最近着任した教員など、全て若手あるいは中堅としました。さらに、セミナーの今後の在り方も考慮し、HIV-1

感染症/エイズだけでなく、HTLV-1研究のセッションも設けることにしました。これらの取り組みにより、若手・中堅主導、そしてウイルス横断的な共同研究へつながればと期待しています。また、初の試みとしてWebでのポスター閲覧システムを構築し、本セミナーで活用しました。音声データ(二分間のポスター説明など)やチャット機能も持たせ、閲覧するだけではなく、双方のディスカッションを可能にし、大学院生などの教育にも有意義と期待しています。不慣れな点も多く、スムーズに進行できなかった場面も多かったものの何とかプログラム通りのセミナーとなりました。
末筆ながら、本セミナーの開催にご支援いただきました肥後医育振興会の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願いたします。

